

韓半島の栄山江流域における古墳展開と 前方後円形古墳の出現過程

崔 榮 柱

1. はじめに

韓半島の栄山江流域において前方後円形古墳¹⁾の存在が指摘された(姜仁求 1983)。その後に、固城地域の松鶴洞古墳が前方後円形古墳と指摘され、注目を集め始めた。以降、発掘調査によって固城松鶴洞古墳が円墳を三つ重ねて造成した古墳であることが明らかになった。そのため、主に前方後円形古墳が西南部地域の高敞と霊光地域、海南半島を含めた栄山江流域のみに分布することが明らかになった。韓半島から前方後円形古墳が発見された後、おもな研究傾向は、前方後円形古墳の被葬者の性格を検討することが多く、現在にも続いている。その説の中でも倭人説と在地首長説が有力な説としてある。これらの古墳の特徴が在地的な要素、百済的な要素、日本列島に起源をもつ要素が混在しており、その被葬者を倭人説と在地首長説に断定することが難しいと考えた(吉井秀夫 2010)。

その問題認識を踏まえた上で、栄山江流域における前方後円形古墳の被葬者の性格を把握するためには、栄山江流域の古墳の変遷過程と、各地域の前方後円形古墳の出現過程の研究を先行して検討する必要がある。それで今回は、栄山江流域の古墳の変遷過程と、各地域において前方後円形古墳の出現過程を検討し、それらの被葬者の性格を把握するための基礎的な研究を行いたい。

2. 栄山江流域の古墳の展開

栄山江流域における古墳の変遷過程は、墓域の墳形と埋葬施設の相関関係によって、V段階に分けられる。墳形は梯形・方形・円形・前方後円形があり、埋葬施設は木棺・甕棺・石室などが確認され、それぞれの相関関係は次の〈表1〉である。古墳の墳形と埋葬施設の相関関係によって、画期となる段階は、前方後円形古墳の出現と九州系石室の埋葬施設が確認されるⅢ段階と、前方後円形古墳がなくなり百済系石室(泗泚時代)の埋葬施設が出現するⅣ段階である。

〈表1〉 栄山江流域の墳形と埋葬施設との関係

埋葬施設	梯形			方形	円形	前方後円形	古墳段階	段階
	馬蹄形	長梯形	短梯形					
木棺単独	◎	○	○				複合梯形墳	1類
木棺中心+甕棺追葬	○	◎	○					2類
甕棺中心+木棺		○	◎					3類
九州系石室(+甕棺)				◎	◎	◎	石室古墳	Ⅱ
百済系石室				○	◎	○		Ⅲ
				○	◎			Ⅳ
					◎		Ⅴ	
墳丘	低	水平拡張	垂直拡張	高	高→低	高		

I 段階は、梯形墳が分布し、墳丘は馬蹄形・長梯形・短梯形の周溝が巡らされており、埋葬施設は木棺単独で存在している。次に墳丘は水平拡張して長梯形化しており、埋葬施設が木棺を中心に甕棺を周溝と墳丘に追葬している。この段階では墳丘の残存状態が悪く、周溝の形態によって墳丘の形態を想定する。II 段階は、梯形墳と方墳・円墳が分布し、埋葬施設は甕棺を中心に木棺を追葬している。短梯形の墳丘で、次第に墳丘は垂直拡張して高大化し、方形と円形の古墳が造られている。III 段階は、方墳・円墳・前方後円形古墳が分布し、埋葬施設は九州系（E IX 1 型式・E IX 2 型式）と百済系（B II 型式・横口 I 型式）の石室が存在しており、一部には甕棺を追葬している。IV 段階は、方墳・円墳が分布し、埋葬施設は百済系石室（陵山里型石室：F IX 型式・G IX 型式）である。V 段階は、円墳が次第に小型化され、埋葬施設は百済系石室（G IX 型式・F VI 型式、無袖石室：F X 型式）である（崔榮柱 2011 第 I 章～第 III 章を参考）。

〈表 2〉 梯形墳類型と典型専用甕棺との関係

甕棺分類	A 型	B 型	C 型	備考
梯形墳類型				
複合梯形墳 1 類	◎			馬梯形の墳丘を中心
複合梯形墳 2 類	○	◎	○	長梯形の墳丘を中心
複合梯形墳 3 類		○	◎	短梯形の墳丘を中心
古墳（方形・円形）			◎	

ちなみに典型専用甕棺は、墳墓 I 段階から III 段階まで確認される。甕棺²⁾ は大きく三つに分けられ、A 型→B 型→C 型と変遷する。複合梯形墳³⁾ と典型専用甕棺との関係は、複合梯形墳 1 類型—典型専用甕棺 A 型、複合梯形墳 2 類型—典型専用甕棺 A 型・B 型、複合梯形墳 3 類型—典型専用甕棺 C 型と代用して変遷している。一方、典型専用甕棺 C 型は I 段階の複合梯形墳 2 類型から III 段階の古墳（方形・円形）まで長く使われている。

〈I・II 段階〉

この段階では梯形墳に木棺・甕棺などが複合的に埋葬されており、複合梯形墳段階に該当する。栄山江流域の上流は、潭陽台木里、光州河南洞・平洞、羅州長燈遺跡などに分布し、長梯形の墳形で埋葬主体部に木棺、さらに甕棺を周溝と墳丘中に追葬している。光州平洞遺跡と羅州長燈遺跡では墳丘が水平拡張して長くなる。中流は、羅州伏岩里と永洞里の古墳群以前段階の梯形墳があり、羅州伏岩里の梯形墳は垂直拡張が行われ、墳丘が高くなっている。下流は、羅州龍虎・靈岩万樹里・内洞里・新燕里遺跡などが分布している。靈岩万樹里・内洞里 1 号・新燕里 9 号墳では木棺が埋葬主体として遅くまで残っている一方、甕棺を埋葬主体とする梯形墳が出現してから在地的性格が強くなっている。典型専用甕棺 C 型が主に出土している。

瓦灘川流域の高敞地域では礼智里・万洞・城南里・南山里遺跡、靈光地域では郡洞遺跡が分布している。高敞万洞遺跡は短梯形の墳丘に木棺を埋葬している一方、中西部地域の周溝土壙墓と同じ形態が一部で確認されている。他の遺跡は I 段階の複合梯形墳 1・2 類に相当する。靈光郡洞遺跡は甕棺を周溝と墳丘中に追葬する 2 類で、I 段階に相当し、典型専用甕棺 A 型のみ出土する。

咸平地域の古幕川流域では咸平蓴村・万家村遺跡、咸平川流域の古陽村・盤岩遺跡などが分布している。古幕川流域の蓴村遺跡は馬蹄形・短梯形・長梯形が確認され、地域によって時間差が生じている。万家村遺跡は墳丘が接続し（水平拡張）、規模が大型化しており、典型専用甕棺 A 型のみ出

土している。咸平川流域の古陽村と盤岩遺跡は木棺を埋葬しており、馬梯形・長梯形の墳形が確認される。

海南半島では新琴・黄山里分吐遺跡が確認される。黄山里分吐遺跡は長梯形の墳形で、木棺を埋葬し、さらに甕棺を周溝に追葬しており、典型専用甕棺 A 型が出土する。

Ⅱ段階の後半では、羅州潘南古墳群の新村里・徳山里・大安里古墳から甕棺を埋葬主体とした梯形墳形が出現し、続いて方形と円形古墳が出現している。栄山江流域の上流の山亭洞遺跡は木棺を埋葬主体とした円墳と、平同遺跡から甕棺を埋葬主体と推定する円墳が出現している。瓦灘川流域の高敞の長斗里古墳と、推定方形墳の鳳徳遺跡、壮谷里・群儒里・龍水里古墳と霊光の丹德里古墳では、円形と方形の甕棺古墳が出現している。咸平川流域の古陽・盤岩古墳では円形の甕棺古墳が出現している。他の地域では甕棺古墳がまだ確認されていない状況である。

〈Ⅲ段階〉

この段階では九州系石室と百済系石室を埋葬主体として造られる一方、甕棺が続いて使用されており、墳形は方形と円形、前方後円形が確認している。栄山江流域の中流の羅州伏岩里 3 号墳、海南地域の造山古墳は、九州系石室が早くから造られており、Ⅲ段階の後半になると、栄山江流域の下流の羅州潘南古墳群を外す地域から前方後円形古墳が出現している。栄山江流域の上流では潭陽古城里古墳・聲月里古墳、光州月桂洞 1 号・2 号墳、光州明花洞古墳・堯基洞古墳が、下流は霊岩チャラボン古墳などが確認されている。高敞地域の七岩里古墳と霊光地域の月桂古墳、咸平地域では古墓川の新徳 1 号古墳と咸平川流域の長鼓山古墳・馬山里古墳、海南半島は海倉湾一帯の龍頭里古墳、北日面一帯の長鼓峰古墳が確認されている。

前方後円形古墳の埋葬主体施設は基本的に九州系石室であるが、霊岩チャラボン古墳は横口 I 型式の百済系石室が造られている。円墳と方墳の埋葬施設は、百済系石室と九州系石室が混合した複合型石室が造られており、次第に百済系石室の特徴が多くみられる。

〈Ⅳ段階〉

この段階では百済系石室が埋葬主体として造られており、墳形は円形と方形（Ⅲ段階に造られた墳丘に埋葬施設を追葬する場合）である。泗泚型石室（F IX 型式・G IX 型式）は全地域で造られており、在地的特色がみられる古墳も出現している。高敞礼智里古墳、咸平新徳 2 号、新安道昌里古墳は典型的な泗泚型石室（F IX 1 型式）であり、羅州伏岩里 3 号墳 7 号・13 号・16 号・17 号石室は G IX 型式で、特に 7 号・16 号の副葬品は階層が高い者の所有品と考えられ、他の石室より階層のレベルが高いと考えられる。一方、この段階から高敞竹林里古墳群、長城鶴星里古墳群、咸平石溪古墳群、咸平馬山里古墳群（前方後円形古墳を含む）、長興葛頭古墳群、長興新月里古墳群などの百済系石室の古墳群が造られている。

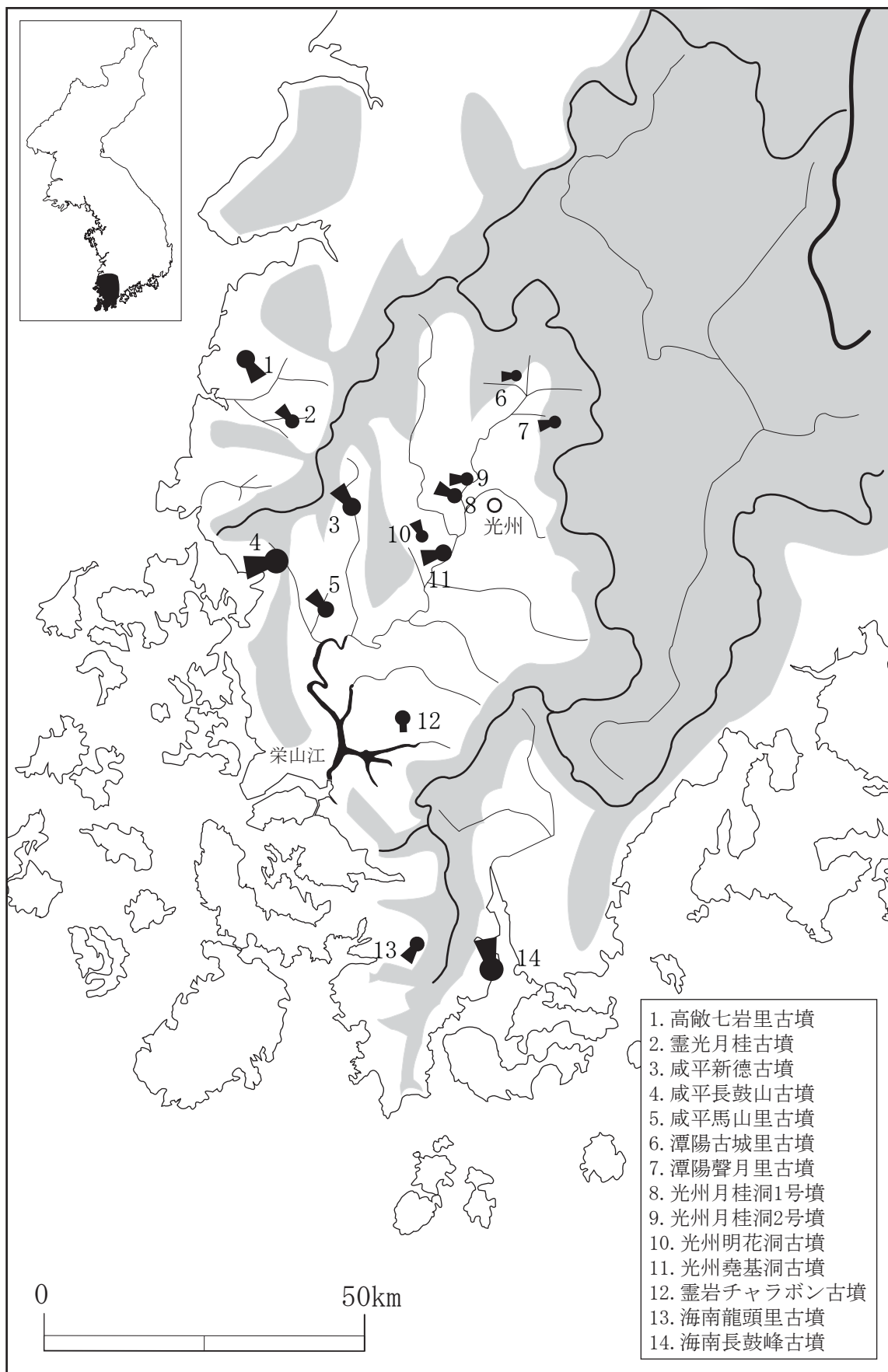


図1. 榮山江流域における前方後円形古墳の分布図

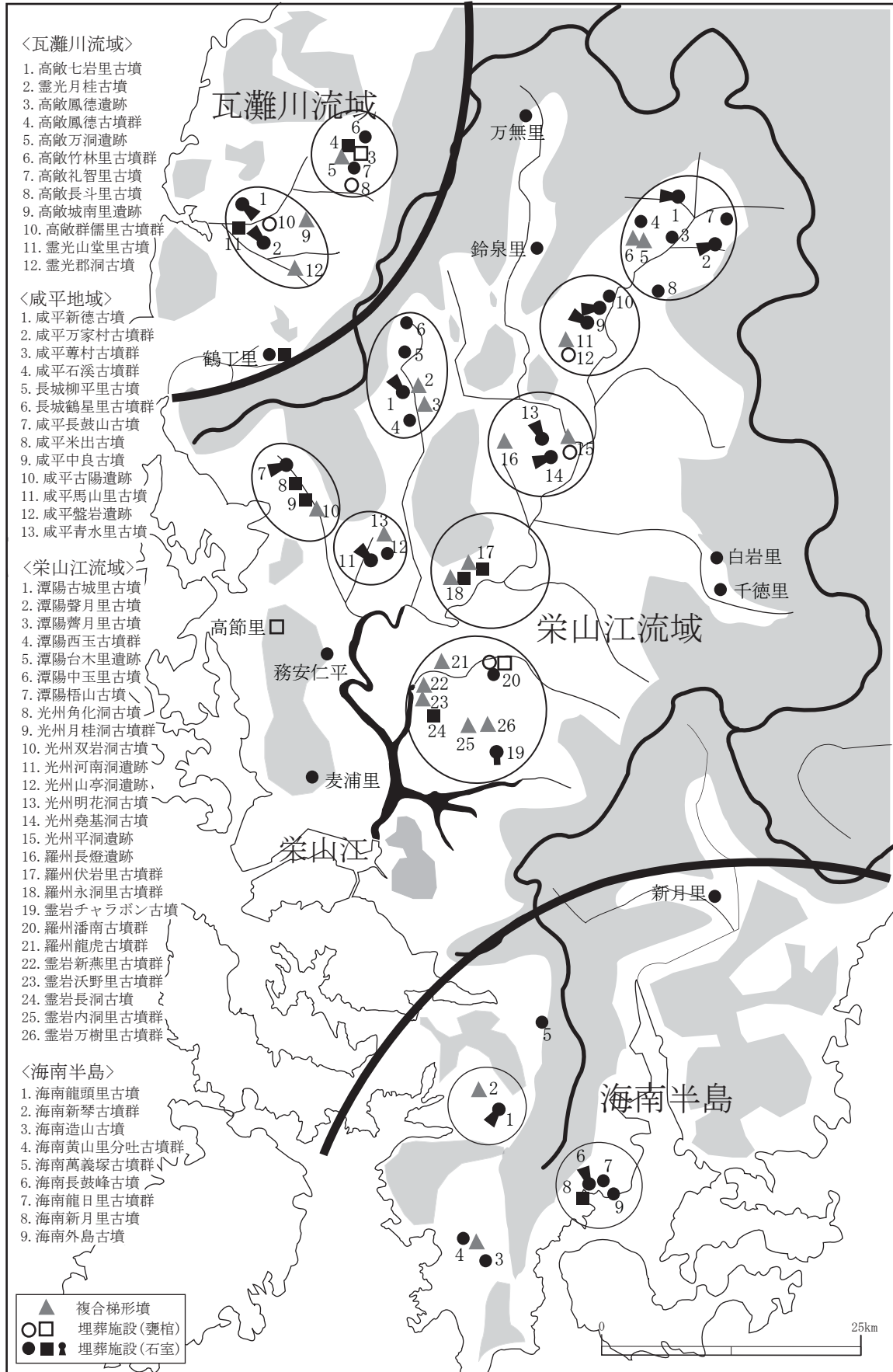


図2. 榮山江流域における前方後円形古墳と周辺の前古墳群の分布図

〈V段階〉

この段階ではⅣ段階の古墳群が続いて造られており、円墳が次第に小型化し、埋葬主体施設は主に無袖式石室のFⅩ型式と、FⅥ型式などが多く造られている。GⅨ型式の石室は羅州大安里4号墳があり、他の石室より階層が高い。古墳の規模は10m前後のものが多くなり、一部の古墳は20m以上のものが確認される。

3. 前方後円形古墳の出現過程

前方後円形古墳が出現している栄山江流域（上流・下流）を中心に、瓦灘川流域（高敞・霊光地域）、咸平地域（古幕川・咸平川流域）、海南半島に分布している。各地域別に前方後円形古墳の出現過程について検討する。

1) 栄山江流域

栄山江流域の上流では潭陽古城里古墳・聲月里古墳が分布する最北端の地域と、光州月桂洞1号墳・2号墳が分布する地域と、光州明花洞古墳・堯基洞古墳が分布する地域に細分できる。下流は霊岩チャラボン古墳などが分布しており、中流域では前方後円形古墳が出現していない。

栄山江流域の中流では羅州伏岩里古墳群と永洞里古墳群が分布している。羅州伏岩里古墳群はⅠ・Ⅱ段階に梯形墳が造られ、Ⅲ段階の前半から古墳が高大化し、九州系石室が出現しており、続いて百済系の横口Ⅰ型式の石室が造られている一方、典型専用甕棺Ⅲ型がⅢ段階の後半まで出現している。この古墳群は7世紀初めまで百済系石室（GⅨ型式・EⅨ3型式）が造られており、副葬品などによって他の地域の石室古墳より階層が高いと考えられ、栄山江流域における大首長層であると判断する。永洞里古墳群も伏岩里古墳群のように古墳の変遷がみられるが、伏岩里古墳群より古墳の規模と石室が小型であり、中流域の小首長層に該当する。

潭陽古城里古墳は、周辺地域の丘陵線に円墳2基があり、古城里古墳の影響を受けて造られるものと想定する。この古墳から離れた地域ではⅢ段階の潭陽齊月里古墳と西玉古墳群、大規模な集落遺跡の台木里遺跡などが分布している。台木里遺跡の周辺に中玉里古墳があり、梯形墳で甕棺を埋葬主体として使われていると想定する。中玉里古墳と齊月里古墳の間に黄金里古墳があり、円墳で埋葬施設は分からないが、在地首長墓と想定される。

齊月里古墳の埋葬主体部は石室であるが、出土状況が悪く、石室の特徴はよく分からない。副葬品は珠文鏡・変形六獣鏡、鏡子・轡の馬具類、指輪・耳飾・玉の装身具、大刀の武器類、瓶・蓋杯の土器類などが出土している。この古墳は倭系の鏡、百済系の土器などが副葬されており、その両地域との交流関係が想定できる。西玉古墳群は12基の円墳があり、2号・3号墳が発掘され、墳丘頂上に竪穴式石槨を埋葬している。3号墳頂上に須恵器系TK47型式の高杯が出土している。台木里遺跡は3世紀（3世紀後葉～5世紀代）にわたって造られている大規模な集落であり、周りには長梯形墳が確認される。

以上のように、潭陽古城里古墳は、少し離れた齊月里古墳と西玉古墳群の影響を受けて造られると考えられる一方、この古墳以前の段階では台木里遺跡の梯形墳、中玉里の梯形墳の存在し、周辺地域の集落遺跡も確認されており、在地勢力が存続している。

潭陽聲月里古墳は、単独に分布しているが、少し離れた地域で円形の昌平古墳がある。この古墳も聲月里古墳の影響で造られる可能性が高い。Ⅳ段階では周辺地域に梧山古墳が造られている。この古墳は周辺にいままで前の段階の古墳と住居址などが確認されておらず、在地勢力との関係が弱い状態である。

光州月桂洞1号墳・2号墳は、周辺に双岩洞古墳が分布し、少し離れた南側に河南洞遺跡と山亭洞遺跡が分布している。双岩洞古墳は九州系石室で倭系鏡が副葬され、月桂洞1号・2号墳との相互関係で造られていた。河南洞遺跡は長梯形で、甕棺を周溝と墳丘中に追葬する複合梯形墳2類型であり、同範囲地域の山亭洞遺跡は円墳3基があり、木棺を埋葬しており、5世紀後葉の蓋杯などを副葬している。ちなみに河南洞と山亭洞遺跡では住居址が確認し、河南洞遺跡では住居址を巡っている溝から壺形円筒形土器が一定の間隔に置かれている。

この古墳は単独で出現し、周りに前の段階の古墳が確認されていないが、少し離れた地域から在地勢力の梯形墳と円墳、生活遺跡が確認されており、在地勢力との関係で出現する。

光州明花洞古墳と堯基洞古墳は、同じ範囲で分布している。周辺地域では5世紀後葉の月田洞遺跡と4～5世紀代の平洞遺跡があり、両遺跡は栄山江の沖積地に位置している。月田洞遺跡は生活遺跡から須恵器系のTK23型式の高杯・ハソウなどが出土し、列島との交流が想定される。平洞遺跡では複合梯形墳2類型と、甕棺が埋葬主体と推定する円墳、住居址などが出土する。少し離れた羅州長燈遺跡では複合梯形墳が確認され、周溝から壺形円筒形土器が出土した。この古墳は、周辺地域の古墳に、列島との交流も行っている集団が確認されており、在地勢力との関係で出現するものとみられる。

栄山江流域の下流は羅州潘南古墳群を中心とする地域と、霊岩万樹里・内洞里・新燕里古墳群を中心とする地域に分けられ、霊岩チャラボン古墳は後者の地域に分布している。

羅州潘南古墳群は新村里・徳山里・大安里地域に36基の古墳が分布しており、徳山里群、新村里1群・2群、大安里群の群集墳に分けられる。各群集墳の中心古墳は、徳山里群が徳山里3号・5号の円墳、新村里1群は新村里6号墳で規模が小さく、墳形は多様であり、新村里2群は新村里9号の方墳であり、大安里群は大安里9号の方墳である。

この地域では複合梯形墳と典型専用甕棺A型・B型が出現せず、遅くまで空白地域である。5世紀代から梯形古墳が大安里1号・2号、新村里4号～6号、徳山里2号、8号・11-1号などの小地域群に分かれて分布する。続いて甕棺を埋葬主体とする円墳と方墳が平地や低い丘陵に分布し、大安里10号、新村里2号・3号、徳山里6号・9号などが該当する。甕棺古墳は6世紀前葉まで存続し、6世紀中葉から横穴式石室を埋葬主体とする小型円墳が散在して分布する。横穴式石室の構造的な変遷をみると、徳山里10号・12号は6世紀後葉、大安里4号は7世紀前葉に編年される。

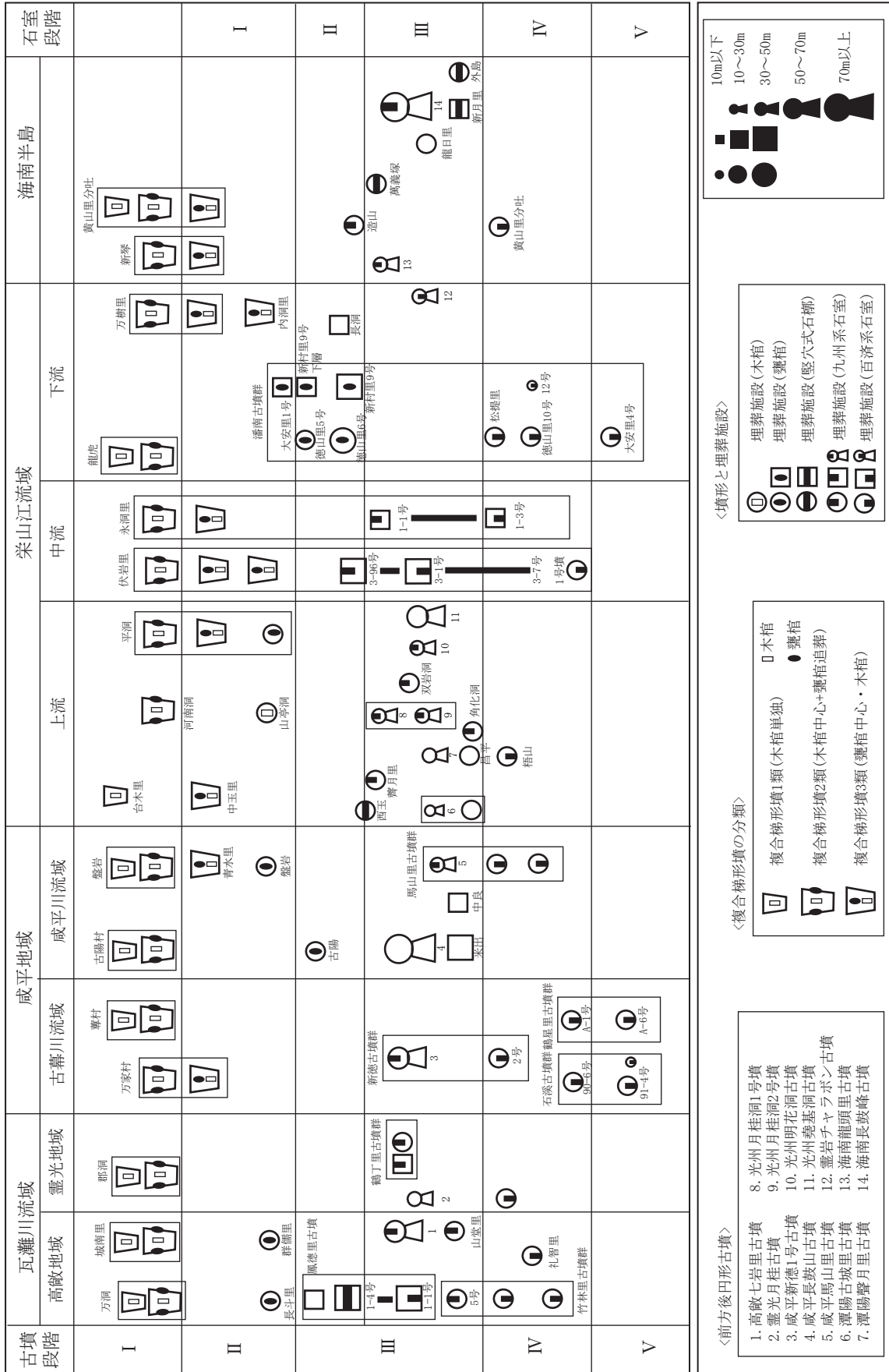


図3. 柴山江流域における前方後円形古墳の出現過程

霊岩チャラボン古墳は、地形的に独立した地域に分布しているが、北側 2 km 以内に霊岩内洞里・万樹里古墳がある。さらに少し離れた北側に霊岩新燕里・沃野里古墳群が位置し、複合梯形墳 2 類型と 3 類型、典型専用甕棺 C 型がおもに確認している。新燕里古墳群は 14 基以上の古墳があり、特に新燕里 9 号墳は木棺の埋葬施設が重複し、甕棺がさらに追葬されて 5 世紀中葉まで造成されている。沃野里古墳群は 20 基以上の古墳があり、万樹里古墳群は 4 基があり、1 号・2 号・4 号は 5 世紀中葉まで遅く造成されている。内洞里古墳群は水平・垂直拡張が行われ、遅くまで造られている。

一方、沃野里長洞古墳は方形で、横口式石室の埋葬主体でさらに墳丘上に甕棺と竪穴式石槨で追葬している。横口式石室の内部に木材の柱を立てていた痕跡が 1m 間隔に残っており、昌寧校洞古墳群の石室によくみられる特徴である。周溝に異形の円筒形土器が出土する。副葬品と甕棺から 5 世紀後葉に編年される。以上のように霊岩チャラボン古墳は周辺の前古墳群の築造勢力との関係、沃野里長洞古墳との関係で古墳がない地域に造られている。

2) 瓦灘川流域

高敞地域の七岩里古墳と霊光地域の月桂古墳が確認される。高敞七岩里古墳から北側の雅山地域では礼智里と万洞遺跡があり、3～4 世紀代の複合梯形墳で、続いて円形の長斗里古墳と、推定方形墳の鳳徳遺跡では、5 世紀代の甕棺を埋葬主体とした古墳が造られている。5 世紀後葉になると鳳徳古墳群が出現し、1 号墳では 5 基の石室が造られており、4 号の竪穴系石室から中国製の青磁壺、須恵器系の小壺装飾ハソウ・高杯、金銅製飾履・金製耳飾の装身具、馬具類、武器類、箭筒、棺釘・鏃、緑釉卓蓋などが出土している。6 世紀前葉まで横口 I 型式 (1 号) と E VIII 1 型式 (3 号・5 号) の石室が続いて造られており、その様相が羅州伏岩里 3 号墳の石室築造様相と共通している。周辺の山麓地域では竹林里古墳群が出現し、5 号は E V 2 型式の石室で 6 世紀第一四半期に編年され、他の石室は 6 世紀中葉以降に続いて造られたと考えられる。

高敞七岩里古墳は、鳳徳古墳群から南側に離れた地域で、霊光の法聖浦に隣接して分布している。七岩里古墳から東側に少し離れた城南里遺跡は 3～4 世紀代の複合梯形墳が出現しており、周辺には壮谷里・群儒里・龍水里古墳と霊光の丹德里古墳があり、5 世紀代の円形の甕棺古墳と想定される。九岩川の隣接して山堂里・用德里古墳があり、埋葬施設は石室と想定され、6 世紀代の古墳群である。七岩里古墳は前の古墳から内陸へ移動し分布しているが、基本的に周辺の在古墳との関係で出現すると考えられる。

霊光月桂古墳は、高敞七岩里古墳と同じ範囲で分布し、在古墳も共通している一方、南側に郡洞と禾坪里の複合梯形墳があり、その在古墳とも関わっている。ちなみに霊光鶴丁里古墳群は E VIII 1 型式の石室で 6 世紀前葉に編年しているが、佛甲川に分布され、月桂古墳から離れている。以上の前方後円形古墳は、鳳徳古墳群を中心とする勢力から離れた地域に分布し、同じ地域を共有する範囲で、周辺の在古墳との関係で出現している。

3) 咸平地域

咸平地域では古幕川の新徳 1 号古墳と咸平川流域の長鼓山古墳・馬山里古墳が分布している。

咸平新徳 1 号古墳は、古幕川の上流に位置し、万家村古墳群に隣接し、円形の 2 号墳が続いて造られている。周辺地域の蓴村と万家村古墳群は 3～4 世紀代の複合梯形墳であるが、まだ 5 世紀代の甕棺古墳が確認されていない。新徳 2 号墳は F IX 1 型式の泗泚型石室であり、これは百濟化する

ことをよく示している。一方、咸平石溪古墳群と長城鶴星里古墳群が6世紀中葉以降に造られはじめ、7世紀代まで続いて造られている。新徳1号墳から北側に4km以内に長城柳平里古墳があり、石室が埋葬主体と推定する円墳であるが、その関係はまだ分からない。以上のように、新徳1号古墳は直前段階の古墳や住居址などの在地勢力がまだ確認されていないが、長城柳平里古墳との関係が注目される。

咸平長鼓山古墳は、咸平川の上流で咸平湾一帯に分布し、周辺の米出古墳、中良古墳、大德里古陽古墳群が分布している。古陽古墳群は複合梯形墳で、甕棺古墳と想定する円墳2基が存在している。中良遺跡では6世紀代の住居址と、壺形円筒形土器が周溝から出土する方形推定古墳がある。米出古墳は墳丘に葺石が確認され、石室が埋葬主体と想定している。長鼓山古墳の影響で造られると考えられる。ちなみに老迪遺跡では6世紀代の住居址から変形円筒形土器と土製埴輪が出土し、長鼓山古墳を造った人々が生活した遺跡である可能性が高い。以上のように長鼓山古墳は周辺の在地勢力との関係で出現する。

咸平馬山里古墳は、咸平川の中流に分布し、周辺に盤岩・郷校・青水里・馬山里古墳群が分布している。盤岩・郷校・青水里古墳群では3～4世紀代の複合梯形墳である一方、盤岩古墳群では甕棺を埋葬主体と想定した円墳と、住居址が存在して5世紀代に編年される。馬山里古墳群は13基で構成され、前方後円形古墳の周りに円墳が造られている。6号円墳は前方後円形古墳の前方墳の前に位置して新徳古墳群と同じ様相がみられる。この古墳群は、前方後円形古墳が出現した後にも続いて造られた古墳群であり、周辺の在地勢力との関係で出現する。

4) 海南半島

海南半島は地形と古墳の位置などからみると四つの地域に分けられ、前方後円形古墳は頭輪山を基準に西側の海倉湾一帯に龍頭里古墳、東側の北日面一帯に長鼓峰古墳が分布している。それら以外の玉泉面一帯では星山里の万義塚古墳群と、白浦湾一帯の造山古墳が分布している。

玉泉面一帯の海南萬義塚古墳では竪穴式石槨墓と横口式石室などの埋葬主体とした円墳が3基確認される。石槨墓の内部から新羅系の土偶装飾瑞獣形土器、鏡、倭系のゴホウラ貝釧、百濟系の土器と金製装飾した曲玉などが出土しており、各地域との交流が活発に行っている。

白浦湾一帯は黄山里分吐遺跡と造山古墳が分布している。この地域では原三国時代の郡谷里貝塚と、日平里土城などの拠点集落が集中し、伽耶系土器などが多く確認されている。黄山里分吐遺跡は複合梯形墳と住居址が4世紀代まで存在し、さらに6世紀中葉以降から石室が造られた一方、5世紀代の甕棺古墳が確認していない。造山古墳は円形で九州系石室(EⅨ1a型式)が埋葬主体であり、須恵器系のハソウ、5世紀後葉の轡・鏡・杏葉・鏡板、変形珠文鏡などが出土し、5世紀末に編年される。

龍頭里古墳は、海倉湾から入って内陸に位置し、周辺に院津里籠岩古墳群と鳳壑里新琴古墳群が分布している。院津里籠岩と鳳壑里新琴古墳群は複合梯形墳で3～4世紀代に編年し、周辺に4～5世紀代の住居址が確認される。龍頭里古墳は石室の構造的に特徴から造山古墳の後に造られた古墳であるため、造山古墳の築造勢力との関係で出現する。

長鼓峰古墳は、海岸に隣接しており、周辺に巨漆馬土城、新月里古墳、龍日里龍雲古墳群、外島の石槨墓などが1km以内に集中して分布している。この地域ではまだ複合梯形墳と甕棺古墳が確認されていない。新月里古墳は方形で墳丘に葺石が確認され、埋葬主体は赤色顔料を塗りつけた石槨墓

である。龍日里龍雲古墳群は横口式石室として提瓶と倭系大刀などが出土しており、外島の石槨墓からは三角板革綴短甲が出土した。巨漆馬土城の周辺では6世紀代の土器片が採集されており、長鼓峰古墳の居館と推定される。以上のように周辺の古墳と土城は6世紀代に編年され、長鼓峰古墳が出現する際に造られた遺跡である。この古墳は海南の他の在地勢力との関係で、古墳がない地域で単独に出現すると想定する。

4. まとめ

以上のように、韓半島の榮山江流域の古墳の変遷過程と、各地域における前方後円形古墳の出現過程を検討した。榮山江流域の古墳の変遷は、V段階にわたって発展しており、特にⅢ段階から九州系石室と前方後円形古墳が出現している。

前方後円形古墳は、榮山江流域（上流・下流）を中心に瓦灘川流域（高敞・靈光地域）、咸平地域（古幕川・咸平川流域）、海南半島に分布している。おもな前方後円形古墳は周辺の在地勢力との関係で、在地勢力の連接地域や、空地（在地の古墳などが無い地域）に出現している。ちなみに、榮山江流域の中流域では羅州伏岩里古墳群が在地の大首長層に該当し、周辺地域に強い影響力を与えており、前方後円形古墳の出現にも関係していたと推測する。

註

- 1) 韓半島の榮山江流域では日本列島固有の古墳である前方後円墳と同じ形態の古墳が存在する。この古墳をどのように呼ぶかによって、見解の差が表れる。榮山江流域の現地では、昔から「長鼓山」と呼ばれてきた。形態が鼓と似ているためである。このことをもって「長鼓墳」と呼ぶ意見もあるが、日本の前方後円墳との関係を抜きに考えられないため、相互連系性を念頭においた用語が妥当と考えられる。日本の前方後円墳は、日本古墳時代の社会・政治体制の運営原理の核心をなす象徴的なもので、原則的にはヤマト政権を頂点とした政治体系で、ヤマト政権と地方首長の政治的な支配・従属関係を示したと考えられている。このような意味を内包する用語を借用すれば、榮山江流域の古墳が直ちに日本古墳時代の体制内に編入されることを意味しかねないため、使わないのが妥当である。以上のことを配慮して筆者は「前方後円形古墳」という呼ぶことにする。
- 2) 典型専用甕棺は、頸部が長く開き先端部が外反するA型、口縁部が長く広がってそのまま終わるB型、口縁部が胴体部から広がるが、直線的にのびるC型に分類できる。
- 3) 複合梯形墳は木棺と甕棺の埋葬施設が主体部と附属部に分けて配置し、主体部に単独と複数に安置すること、附属部に甕棺を追葬すること、墳形が馬蹄形・短梯形・長梯形があり、その相関関係で、三つに分けられる。複合梯形墳1類は木棺が主体に単独であり、馬蹄形の墳形で構成しているが、一部に周溝に生活用甕棺を追葬している。複合梯形墳2類は木棺が主体に単独であり、長梯形の墳形で構成し、周溝と墳丘中に典型専用甕棺を追葬している。複合梯形墳3類は甕棺と木棺が主体に複数であり、短梯形の墳形で構成しており、周溝と墳丘中に典型専用甕棺を追葬することはなくなっている。

参考文献

- 林永珍 1994 「光州月桂洞の長鼓墳2基」『韓国考古学報』31
 2002 「榮山江流域圏の墳丘墓とその展開」『湖南考古学報』16
 2007 「長鼓墳（前方後円形古墳）」『百済の建築と土木』忠清南道歴史文化研究院
 林永珍・趙鎮先 2000 『全南地域古墳測量報告書』全羅南道・全南大学校博物館
 吳東潭 2008 「湖南地域の甕棺墓の変遷」『湖南考古学報』30

- 姜仁求 1983 「前方後円墳の発見の意見：咸安固城地方—日本の前方後円墳の源流と関連して—」『嶺大新聞』1048
- 1984 「韓国の前方後円墳」『韓国史論』14
- 金洛中 2009 『栄山江流域の古墳研究』ソウル大学校大学院博士学位論文
- 崔榮柱 2011 『三国・古墳時代における韓日交流の考古学的研究—横穴式石室を中心に—』立命館大学大学院博士学位論文
- 崔盛洛 2004 「前方後円形古墳の性格について再考」『韓国上古史学報』44
- 徐賢珠 2007 「栄山江流域長鼓墳の特徴と出現背景」『韓国古代史研究』47
- 成洛俊 1983 「栄山江流域の甕棺墓研究」『百濟文化』15
- 朴天秀 2001 「栄山江流域の古墳」『東アジアと日本の考古学—第1巻墓制①』同成社
- 2002 「栄山江流域における前方後円墳の被葬者の出自とその性格」『考古学研究』49-2
- 忠南大学校百濟研究所編 1999 『韓国の前方後円墳』百馬学術叢書11
- 大韓文化遺産研究センター 2010 『集中解剖 韓国の前方後円墳』創立2周年記念学術セミナー
- 東 潮 2002 「倭と栄山江流域—倭韓の前方後円墳をめぐって」『前方後円墳と古代日朝関係』同成社
- 辻 秀人 2006 「栄山江流域の前方後円墳と倭国周縁地域の前方後円墳」『百濟研究』44
- 土生田純之 1996 「朝鮮半島の前方後円墳」『専修大学人文科学年報』26
- 柳沢一男 2001 「全南地方の栄山江型横穴式石室の系譜と前方後円墳」『朝鮮学報』179
- 2006 「5～6世紀の韓半島西南部と九州」『伽耶、洛東江から栄山江へ』第12回伽耶史国際学術会議
- 吉井秀夫 2001 「栄山江流域の三国時代墓制とその解析をめぐって」『朝鮮史研究会論文集』39
- 2010 『古代朝鮮墳墓にみる国家形成』京都大学学術出版会
- 和田晴吾 2007 「東アジアの『開かれた棺』」『渡来系遺物からみた古代日韓交流の考古学的研究』平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書
- 2010 「日本の古墳の特徴と伽耶の墳丘墓」『慶南の伽耶古墳と東アジア』韓・中・日国際学術大会

（大韓民国全南大学人類学科講師）